

コリントの信徒への手紙一 15章 12節～34節

キリストは死者の中から復活した、と宣べ伝えられているのに、あなたがたの中のある者が、死者の復活などない、と言っているのはどういうわけですか。死者の復活がなければ、キリストも復活しなかったはずです。そして、キリストが復活しなかったのなら、わたしたちの宣教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無駄です。更に、わたしたちは神の偽証人とさえ見なされます。なぜなら、もし、本当に死者が復活しないなら、復活しなかったはずのキリストを神が復活させたと言って、神に反して証しをしたことになるからです。死者が復活しないのなら、キリストも復活しなかったはずです。そして、キリストが復活しなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお罪の中にあることになります。そうだとすると、キリストを信じて眠りについた人々も滅んでしまったわけです。この世の生活でキリストに望みをかけているだけだとすれば、わたしたちはすべての人の中で最も惨めな者です。

しかし、実際、キリストは死者の中から復活し、眠りについた人たちの初穂となりました。死が一人の人によって来たのだから、死者の復活も一人の人によって来るのです。つまり、アダムによってすべての人が死ぬことになったように、キリストによってすべての人が生かされることになるのです。ただ、一人一人にそれぞれ順序があります。最初にキリスト、次いで、キリストが来られるときに、キリストに属している人たち、次いで、世の終わりが来ます。そのとき、キリストはすべての支配、すべての権威や勢力を滅ぼし、父である神に国を引き渡されます。キリストはすべての敵を御自分の足の下に置くまで、国を支配されることになっているからです。

最後の敵として、死が滅ぼされます。「神は、すべてをその足の下に服従させた」からです。すべてが服従させられたと言われるとき、すべてをキリストに服従させた方自身が、それに含まれていないことは、明らかです。

すべてが御子に服従するとき、御子自身も、すべてを御自分に服従させてくださった方に服従されます。神がすべてにおいてすべてとなられるためです。

そうでなければ、死者のために洗礼を受ける人たちは、何をしようとするのか。死者が決して復活しないのなら、なぜ死者のために洗礼など受けるのですか。また、なぜわたしたちはいつも危険を冒しているのですか。兄弟たち、わたしたちの主キリスト・イエスに結ばれてわたしが持つ、あなたがたに対する誇りにかけて言えば、わたしは日々死んでいます。単に人間的な動機からエフェソで野獣と闘ったとしたら、わたしに何の得があったでしょう。もし、死者が復活しないとしたら、

「食べたり飲んだりしようではないか。どうせ明日は死ぬ身ではないか」ということになります。思い違いをしてはいけません。

「悪いつきあいは、良い習慣を台なしにする」
のです。正気になって身を正しなさい。罪を犯してはならない。神について何も知らない人がいるからです。わたしがこう言うのは、あなたがたを恥じ入らせるためです。

横須賀長沢キリスト教会

2020年7月5日 第二主日礼拝説教要約

コリントの信徒への手紙一 15章 12節～34節

「私たちの恥と誇り」

説教者 大須賀真人牧師

みなさんは「死者」の復活をどのように思われますか？一般常識では、「死者」が蘇るなどあり得ないとされています。実際に「死者」が蘇ったのを見たことのある人はいないでしょう。しかし、イエス・キリストが死から蘇ったことについて聞かれたら、私たちはどのように答えるでしょう？ここに集われた方々は、おそらく、それは信じていますとおっしゃることでしょう。しかし、じゃあ「死者」の復活を信じているのか？…と言われたらどうなのでしょう。実は、これは私たちが信仰生活を送っていくなかでは、絶えず直面する押し問答です。

今日の聖書箇所では、「死者」の復活を信じることができない人が描かれています。押し問答のなかで、希望を見出すことができない様子が見られます。

12節でこのようにあるように、死者の復活などないと主張している人たちは当時の思想の影響があったことも考えられます。また、32節から34節を見ると、事態はもう少し深刻な状況だったかも知れません。「食べたり飲んだりしようではないか。どうせ明日は死ぬ身ではないか」とあります。

「悪いつきあいは、良い習慣を台なしにする。」とあります。イエス・キリストを信仰する者として、みなさんどのように思われますか？たいへん投げやりで、的外れな言葉と思われることでしょう。しかし、この箇所を何度も読み返していくと、もっと深刻な状況が見えてきます。そう思わずにはやっていられるかといった、嘆きと呻きのようなものが見えてきませんか。貧富の差といった社会の課題の影響があったかも知れません。地中海の中継都市、国際的な貿易都市としての、外交面、政治面での課題の影響があったかも知れません。さらに、当時の教会は、イエス・キリストは明日にでも来られると信じていました。もちろん、私たちもいつ来るか分からないけれども、来られると信じています。しかし、当時の教会は、そんな生半可な信じかたではありませんでした。明日にでも、次の瞬間にでも来られると堅く信じていたのです。それほどまでに、現実の生活のなかでの嘆きと呻きは大きかったとも言えましょう。今の状況から抜け出すことへの期待はたいへん大きかったはずですが。それなのに、昨日も来なかった、今日も来なかった、明日は・・・

となっていく。つまり、期待を裏切られたと感じさせられる毎日が続いていくのであります。そして、やがてそれは大きな失望感へと変わっていく。神は何をされているのか、イエス・キリストはいつになっても来ないじゃないか、そして、自分たちのこれからの生活や人生を考えていったとき、期待することをやめる。つまり、イエス・キリストなど来るわけがない、死者の復活などあるわけがない。それよりも、今の目の前の生活をどうにかせねばならない、出来る限り今の目の前の生活が楽になるように考えることとなります。自分の都合や感情が優先されていくことになるのです。それで、「食べたり飲んだりしようではないか。どうせ明日は死ぬ身ではないか」ということになるのです。

さて、それでも、ここまでならまだいいんです。ここまできて、自分は信じられない者であると認識があれば、まだいいのです。ただ、今日のある者という人は、そんなわきまえのある人ではなかったと思います。おそらく、自分は立派なクリスチャンだと、主張していた。イエス・キリストなど来るわけがない、死者の復活などあるわけがない、そう言いながら、自分の都合と感情に身を任せておきながら、それでも自分は立派なクリスチャンとして扱われるべきだと主張していたのです。今日のこのある者は、コリント教会のなかでも、重要な役職についていたか、そうでなくとも、かなりの影響力を持つ人であったと思います。パウロがここまで書いているということは、それだけ教会に影響を与えるほどの大きな動きがあったということです。つまり、そんな立場も利用して、つつい自分の都合や感情に任せて、突っ走ってしまった。それに対して、パウロが警鐘を鳴らしているのです。「わたしがこう言うのは、あなたがたを恥じ入らせるためです。」と語っています。このところは本当に気をつけて聞きたいと思います。ここで、パウロはある者に、なにか改めて恥をかかせようとしているわけではありません。そうではなく、もう既に、恥を晒してしまっているでしょ、ということです。

そのことに気がついて、受け入れなさいと、言っているのです。ここで言われている恥というのは、罪とも言い換えられるでしょう。つまり、そこに罪があるでしょと。イエス・キリストなど来るわけがない、死者の復活などあるわけがない、とってしまうのは罪ですよ、それで自分の都合や感情に身を任せてしまうのは罪ですよ。そして、パウロは13節～19節にかけて、それがいかに私たちキリスト者の信仰からの的外れなものか、説明しています。そんな的外れに陥っているあなたが、大胆不敵にも教会の中心に立って声を張り上げ、いかにも自分の言っていることが正しいかのように語り、人々を的外れな方向に導いているとは何事かと。私たちも、様々な現実と直面するとき、的外れに陥り、罪に支配されそうになることがよくあるのではないのでしょうか？それは、信仰生活全般において、教会の事柄の全般において、あらゆるところで先にも言った押し問答のようなことがあり、時として恥をかくようなことを

して、罪に陥っている状態にすることがあるのではないのでしょうか？しかし、それは、さほど問題じゃない。何故ならば、私たちは十字架の主イエス・キリストに捉えられ、道を与えられているからです。本当に問題なのは、恥をかいていることを認めない、罪に陥っていることを認めないことです。繰り返しのようになりますが、パウロはここで、恥をかかせようとして、恥じ入らせようとしているのではありません。既に恥をかいている、罪に陥っている自分に気がつくように言っているのです。そして、そんなあなたと共に、主は絶おられますよと、だから「正気になって身を正しなさい。」と言っています。

そして、20節～28節にかけて、パウロは私たちの信仰をもう一度語るのです。

主は私たちと共におられ、主の秩序をもって私たちを導いてくださっている。これがパウロが聖書で語っている、私たちキリスト者の誇りなのです。誇りについてはコリントの信徒へ手紙二によく記されています。そこでは、主がいかに関心を持ってくださっているか、いかに自分を力強く導いてくださっているかが記されています。そのことをよく表すために、自分の恥や弱さこそ、パウロは誇ると言っています。そうすれば、自分ではなく、主にある誇りこそがよく表されてくるからです。また、パウロは、恥を語る時にも、誇りを語る時にも、周囲の人たち、特にまだ神を知らない人たちへの配慮を忘れません。恥については、今日の聖書箇所でも「正気になって身を正しなさい。罪を犯してはならない。神について何も知らない人がいるからです。」と語っています、誇りについても、パウロはあえて自分自身を誇りません。

証しをすれば尽きないでしょうし、本当に色々な恵みを語る事ができる。しかし、それでも、自分自身を誇らないように、自分自身についてはただただ弱さを誇り、そうして主の誇りがあらわになるように努めているのです。それは自分が過大評価されて、周囲の人たちを的外れな方へいかせないため、また、自分自身も思い上がることがないためです。そのために自分はサタンから送られた使いを与えられたとすら言っています。恥においても、誇りにおいても、パウロは自分も含めて、すべての人たちが的外れな方向へ逸れていかにないように、十分に注意を払いながら語っているのです。

私たちは既に恥をかいている者です。主はそんな私たちをよく知っておられます。そんな私たちを愛して、共に歩み、導いてくださっています。そして、同時に、私たちは既に誇りを与えられています。恥をかく前から誇りを与えられている。ずっと前から、主は私たちを愛し、共に歩み、導き続けてくださっています。

そして、これからも導き続けてくださっている。ですから、正気になって身を正してまいりましょう。主の誇りがあらわにされるように、私たちの恥や罪、弱さこそ誇りましょう。どのような困難にさらされようとも、どんな現実と直面しようとも、たとえ野獣のなかに放り込まれるようなことがあろうとも、主にある誇りは誰にも取り除くことはできません。私たちは、死ぬほどに弱く、恥多き罪人であることに気がつかされていく時、主の誇りがあらわにされます。そんな弱さを誇っていく時、死者の復活を、十字架のイエス・キリストの復活を信じるように導かれていくのです。

【祈禱】

すると主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。

主よ私たち教会を憐んでください。私たち教会を祝福してください。この一週間も主の恵みと祝福が豊かに増し加えられますように。死と復活の主、十字架のイエス・キリストの御名によってお祈り致します。アーメン